

AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学学術情報センターだより 第46号

モスクワ大学学術図書館再訪

岡本 崇男

去年の10月上旬にモスクワ大学の図書館に行く機会があった。マンモス大学なので、図書館も沢山あるのだが、今回の行き先は「学術図書館」である。行き先がわかった時点で、懐かしい気持ちを感じるのと同時に、苦い思い出が蘇った。実は、学術図書館には、まだわたしが今の半分ほどの年齢の時に入館許可書を作るだけのために行ったことがあったのだ。入館許可書を作っただけで、図書館通いをしなかったのは、わたしの怠惰の所為であることは否定しようがない。弁解がましくなるが、やる気が失せたのには以下のような事情があった。

まだ助手だった頃、わたしはモスクワ大学に教員交換協定にもとづいて派遣されることになった。ロシア語の研修と自分の専門の研究をすれば良かったのだが、当時、わたしは研究対象を現代

ロシア語にするか古代ロシア語（11-17世紀のロシア語）にするかを決めかねていて、苦し紛れに古代ロシア語と現代ロシア語の狭間に位置する言語、つまり18世紀のロシア語を研究テーマとしてでっち上げたのだった。これには、それなりの理由がなかったわけでもない。モスクワに派遣される前の2年間、わたしは大学院の「ロシア文化研究」という授業に押しかけて、アレクサンドル・ラジシチェフ（1749-1802年）の『ペテルブルグからモスクワへの旅』（1790年）の輪読に参加していた。わたしは、学部の卒業論文に使う例文を漁るためにこの旅行記を使ったことがあったのだが、その時の関心事はある特殊な構文に絞られていたので、テキストの中身には全く興味を払わなかった。そして、それ以降もロモノソフの『ロシア文法』（1757年）を例外として18世紀の著作など読んだことがなかった。一般に「ロシア文学」と呼ばれているのは19世紀の作品なので、それらに比べると18世紀のテキストの言語は使われている言葉こそ古いが、表現形式はむしろ単純で、ある程度読み慣れれば理解しやすいのではないかと想像していたのだが、それは大きな間違いであった。いざ本気で読もうとすると、全く歯が立たないのである。まず、発想についていけない。自分のことを語る時に3人称構文を多用する。とにかく持って回った言い方だらけなのである。その上、三種類の構文法が使い分けられている。つまり、古語である教会スラヴ語の「浮世離れた」構文、ロシア語の口語体を取り入れ

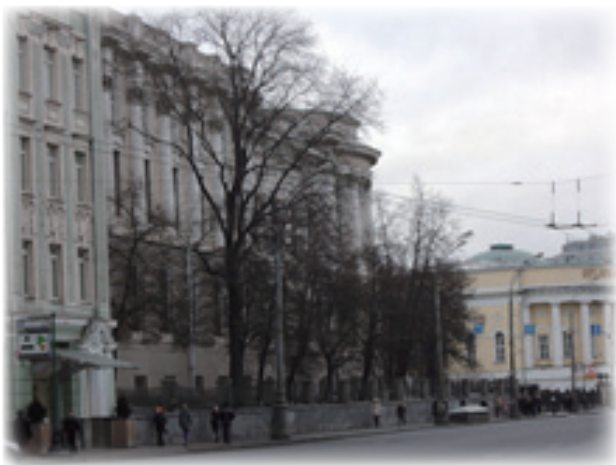


写真1

た単純な構文、そしてこれら二つの構文がラテン語の統語法を強く意識した語りの構文の中に埋め込まれているのである。しかし、読み進んでいくうちに、このスタイルのテキストが発展して現代ロシア語が成立したのではないかと考えるようになった。そこで、モスクワ到着後、モスクワ大学の文献学部ロシア語学科長クラヴヂャ・ゴルシコーヴァ教授と面談した際に18世紀のロシア語を研究テーマにすると言ったところ、ボリス・ウスペンスキー先生を紹介された。日本を発つ少し前に先生の著作『18世紀から19世紀初頭までのロシア文章語史より：カラムジンの言語プログラムとその歴史的起源』（モスクワ、1985年）を入手したばかりだったので（ただし読んでいなかった）、わたしの目の前でロシア語歴史文法の権威が気鋭のロシア語史研究者に電話をして、数分のうちにわたしの指導教官になる了解を取ってくれたことには驚かされた。そして、その週の土曜日にどきどきしながらウスペンスキー先生に会いに行った（この先生は土曜日の3時間目にしか授業がなく、それ以外の曜日は自宅で研究・執筆に専念されていたらしい）。

先生とはロシア語学科の共同研究室で面会した。先生は開口一番、「研究テーマはなんですか」と尋ねられたので、「18世紀のロシア語です。現

代ロシア語が成立する過程を研究したいのです」と答えると、「それではわたしの近著をご存知ですか」と言われたので、待ってましたとばかり「はい。入手済みです。まだ全部は読んでないのですが…」と照れ笑いで答えた。先生は上機嫌で、「18世紀の文学作品を何か読みましたか」とおっしゃるので、わたしは「ラジシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』を読みました」と答え、さらに「彼の作品の言語は18世紀ロシア語の典型ですよ」と付け加えた。すると先生は、真剣な面持ちで、「ラジシチェフの言語は例外的です。典型的な18世紀ロシア語はニコライ・カラムジンのテキストです」とおっしゃったのである。その時点でわたしは言葉を失ってしまった。先生は、無言のわたしにはおかまいなしに、モスクワ大学学術図書館の入館証取得に必要な紹介状を書いてくださり、前述の著書の少し前にご自身が公表された18世紀の言語論争にかんする長めの論文の抜刷りとキエフ・ルーシの言語状況を扱ったモノグラフを手土産に持たせてくださったのであった。特に、論文はよく読んでおくようにということであった。そして、宿舎に帰ってその論文の最初のページをざっと見て、自分の無知を思い知らされた。学術図書館の蔵書を利用する前に、18世紀の言語論争だけでなく、18世紀とい

う時代をしっかりと勉強する必要があることがわかったのである。しかし、せっかく紹介状を書いてもらったのだから、入館証だけは作っておくことにした。

モスクワ大学の学術図書館はクレムリンからそれほど遠くないモスクワ市の中心部にあった。モスクワ大学の建物といえば、当時「レーニン丘」と呼ばれていた高台にそびえ立つ巨大なスターリン建築（大学本部と学生寮が収まっている）が思い浮かべられるのだが、学術図書館は中心部の旧キャンパスにある歴史的建造物であった。玄関



写真 2

を抜けると小さなホールがあり、利用者たちがいくつかの方向に分かれていく。日本の公共施設のように案内板とか掲示がないので、どこへ行けば入館証を作ってもらえるのかわからず、あたりをきょろきょろ見回していると、ホールの真ん中に作業用の長衣を羽織って、無地のプラトーク（スカーフのようなもの）で頭を覆った骨と皮だけの老婆がわたしの存在に気付き、間髪入れずに「止まれ。お前はどこへ行くつもりだ。入館証を出せ！」とわたしを睨みながら叫んだのである。一般に、ロシア（当時はソ連）には赤の他人に対してぶっきらぼうな態度を取る人が多いことは承知していたのだが、このお婆さんの剣幕にはたじろがされた。わたしがしどろもどろになりながら、まだ入館証を持っていないので、それを作ってもらいに来たと答えると、「そこの階段を上がって2階の事務室に行け」と再び怒鳴られてしまった。もっとも、帰り際にわかったのだが、お婆さんは、誰に対しても「お前」としか言わないので、わたしだけが不審者扱いされたのではなかった。お婆さんは案内係のようなことをしていたのだ。当時のソ連ではよくあることなのだが、極めて限られた範囲の仕事だけを任されている老人が街でも大学の施設内でも大勢働いていた。社会主義体制なのでもちろん年金制度は整備されていたのだが、わずかな金額しかもらっていない人が少なからずいて、体が動く限り何らかの軽労働に従事して生活費を補っていたようだ。だから、あのお婆さんに恨みはない。

ところで、30年ぶりに懐かしのモスクワ大学 学術図書館に行けると思っていたのだが、実際に訪れたのは2005年に完成した新館だった。町の中心部の旧館も存続しているようなのだが、全部で17ある学術図書館の中心的な機能は旧館から大学本部の近くの巨大な新館に移転していた（旧館：写真1、新館：写真2）。残念ながら図書館の内部を見学する時間の余裕はなく、目的地である大会議室で朝から夕方まで缶詰になっていたの

だが、幸い会議室の内部の写真を撮ることができたので掲載させていただく（写真3）。壁面の大きな装飾の中心に描かれた人物がモスクワ大学の創設者で18世紀を代表する学者・文人であるミハイロ・ロモ



写真3

ノーソフである。ポートレートの周りには、ロモノーソフ直筆のものらしいスケッチ、設計図そして18世紀風の筆記体で書かれた文章の断片があしらわれていて、ロシアにしては趣味の良いもののように思えた（馬鹿でかいのが玉に瑕ではあるのだが）。しかし、筆記体の文字をよく見ると単語の綴りが18世紀のものではなく、1918年に成立した現代正書法に則っている。装飾であるとはいえ、昔の綴りに慣れていない現代人の便宜が優先されたのだろうか。かつて18世紀のロシア語を勉強しようと意気込んでモスクワに乗り込み、即座に鼻先をへし折られた身としては、やや興ざめた瞬間であった。

（おかもと たかお

ロシア学科教授・学術情報センター長）

著書紹介「訳された近代:文部省『百科全書』の翻訳学」

もうひとつの「百科全書」との出会い

長沼 美香子



本書では、翻訳学（Translation Studies）の観点から、文部省『百科全書』を読み解くことを目指しました。具体的には次のような翻訳テキスト群を分析しています。

【文部省『百科全書』91編】

天文学 気中現象学 地質学 地文学 植物生理学 植物綱目 動物及人身生理 動物綱目 物理学 重学 動静水学 光学及音学 電気及磁石 時学及时刻学 化学篇 陶磁工篇 織工篇 鉱物篇 金類及鍊金術 蒸気篇 土工術 陸運 水運 建築学 温室通風点光 給水浴 澡掘渠篇 農学 菜園篇 花園 果園篇 養樹篇 馬牛及採乳方 羊篇 豚兔食用鳥籠鳥篇 蜜蜂篇 犬及狩猟 釣魚篇 漁獵篇 養生篇 食物篇 食物製方 医学篇 衣服及服式 人種 言語 交際及政体 法律沿革事 体 太古史 希臘史 羅馬史 中古史 英国史 英国制度国資 海陸軍制 欧羅巴地誌 英倫及威爾斯地誌 蘇格蘭地誌 愛倫地誌 亜細亜地誌 亜弗利加及大洋州地誌 北亜米利加地誌 南亜米利加地誌 人心論 骨相学 北欧鬼神誌 論理学 洋教宗派 回教及印度教 仏教 歳時記 修身論 接物論 經濟論 人口救窮及保険 百工儉約訓 国民統計学 教育論 算術及代数 戸内遊戯方 体操及戸外遊戯 古物学 修辞及華文 印刷術及石版術 彫刻及捉影術 自然神教及道德学 幾何学 聖書 縁起及基督教 貿易及貨幣銀行 画学及彫像 百工応用化学 家事儉約訓

（青史社による復刻版タイトル）

皆さんは「百科全書」と聞くと、何を思い浮かべますか？

「なんとなく百科事典の古い言い方のような気がする」。あるいは「世界史の教科書に登場したアンシクロペディスト「百科全書派」—18世紀フランスの啓蒙思想家たち、例えばディドロやダランベールが活躍し、彼らの編集した「百科全書」がフランス革命に影響を与えた、というようなことが確か書いてあった」等々。

そういう意味では、本書で私が研究対象とする明治初期の文部省『百科全書』は、もうひとつの「百科全書」かもしれません。しかし実は「百科全書」ということばの淵源は、この翻訳書にあります。

文部省『百科全書』は、英国ヴィクトリア朝の啓蒙書 *Chambers's Information for the People* を起点テキスト（原著）とする翻訳書で、明治政府が国家的事業として企図したものです。複雑な出版状況や多数の関係者、多年にわたる翻訳プロジェクトにもかかわらず、関係史料がほとんど残っていない—そんな事情もあるのですが、何よりも翻訳研究そのものが軽視されていたから、長い間忘れられた存在でした。

明治時代にタイムスリップしてみたいですか。でも現代の私たちにも、内容が想像できるタイトルも多々ありますね。

さて改めて自分の半生を振り返ると、20代は文化人類学の研究者を目指していましたが、いろいろあって通訳者になりました。通訳の仕事は充実していて本当に楽しかった（という思い出以外は忘れることにしています）のですが、人生半ばで学術研究にのめり込み、博士論文を仕上げました。それを基に書籍化したのが、2017年2月に出版したこの本です。

本書での翻訳学のアプローチが、通訳や翻訳の実践と研究に興味をもつ外大生の知的好奇心にとって、心地よい刺激となれば嬉しいです。

(ながぬま みかこ 英米学科教授)



新視聴覚コーナーの紹介

視聴覚資料をジャケットで選べます

一部の視聴覚資料をこれまでより便利に楽しく選べるようになりました。

当館には、約9000点という多数の視聴覚資料(DVD、LD、VHSなど)があります。ただこれまでは、タイトル、上映年、主演俳優、監督などが書かれた冊子体の目録に目を通すか、館内のOPACで検索することによってしかどんな視聴覚資料があるかを見ることができず、いわゆる「ブラウジング」(*)ができない状態でした。

そこで今年度6月1日から、試験的に一部視聴覚資料のジャケット掲示をはじめました。30点ほどの資料のジャケットを掲示しています。これ



まで知らなかった資料との出会いを作るとともに、ジャケットに書いてあるあらすじなどを読んで、さまざまな資料に興味を持っていただければと思います。資料は職員があるテーマに絞って選

んだものや、今回はトライやるで来た中学生が選んだものなど、それぞれのBOXに



わかれており、どんなものが選ばれたのかもあわせてお楽しみいただけます。毎月掲示対象を変更する予定ですので、是非図書館にお立ち寄りの際は一度目を通してください。

視聴覚ブースは18スペースあり、最大42名のご利用が可能です。授業、勉強の空き間や友達との待ち合わせまでの間など、ぜひ図書館で映画やドラマをお楽しみください。

(白坂)

(*)「ブラウジング」とは…書架上の図書の背表紙をざっと眺めたり、図書や雑誌の中身を拾い読みすることで、求める情報を偶然発見したり、新たな情報に出会うことを意味しています。

(参考) 今まど子編著『図書館学基礎資料』第11版 樹村房 2013

第6回ラーニングアドバイザートークイベント開催報告

岸田 早織

2017年5月16日、図書館内ラーニングコモンズにてトークイベントを開催いたしました。今回は「がいこくご漬けのススメ 一目指せ！国産バイリンガル」をテーマに、外国語習得のポイントについて約1時間お話をさせていただいたのですが、ここではそのイベントの様子をざっくりとご紹介したいと思います。



今回のトークイベントでは、大学院生という立場から外国語習得の成功につながるヒントとなるような7つのポイントを紹介させていただきました。サブタイトルにもあるとおり、日本にいながらにして外国語を習得するにはどうすればいいのか、また留学から帰った後の学習の継続の仕方について自身の経験を元にお話をさせていただいたのですが、そこには人の成功からだけではなく、失敗からも学んでほしいという思いがありました。

当日の会場の様子



私がスペイン語を学習し始めてすぐの頃、自分のレベルに合わない分厚い小説を読もうとして何度もあきらめてしまったエピソードや、私が高校生の頃から実践している“ひとり言学習法”、細かい表現や文法でミスをしてしまっても、伝わるからいいじゃない、とあっけらかんとしているネイティブスピーカーのエピソードなど、少しでもみなさんの外国語学習のモチベーションアップにつながるものになっていれうれしく思います。

私はこれまで、「外国語」というツールを用いてたくさんの人と出会い、たくさんの方を訪れ、たくさんの文化に触れてきました。私の人生から「外国語」ととると、何が残るかわからないくらいです。私がこれまで外国語と関わってきたのは、外国語が好き、人が好き、ただその気持ちがあったからです。みなさんはどうして外国語を学び始めたのですか？どうして外国語を学んでいるのですか？もう一度考えてみてはいかがでしょうか。

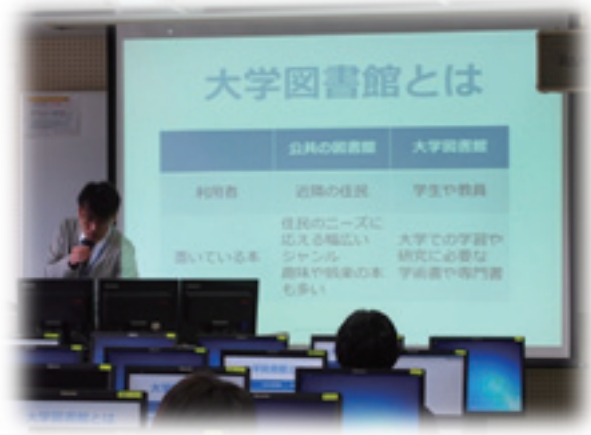
(きしだ さおり ラーニングアドバイザー)



当日は約50名の方にご参加いただきました。お忙しい中足を運んでくださった方々、企画・運営のお手伝いをしてくださった図書館職員のみなさま、本当にありがとうございました。

来年度の初年次教育は…

河野 幸徳



下しましたが、初年次教育の後には多くの新入生が図書館を利用して嬉しく思いました。

最後に私事となりますが、4月17日に図書館から情報メディア班に異動となりました。初年次教育では図書館の使い方ではなく、学内パソコンなどの使い方をお伝えする立場となります。働く場所は変わりますが、みなさんの大学生活がより豊かになるよう、今後も努めていきたいと思います。

(この ゆきのり 情報メディア班職員)

2012 年度からスタートした初年次教育は、今回で6年目を迎えました。

2015 年度以降は出席率が毎年 75% を超えており、受講したことを覚えている方も多いかと思えます。

初年次教育とは、新入生が「大学での学習の仕方」になじめるよう、講義形式で大学職員が支援するものです。内容としては、情報メディア班から教材 BOX の使い方、学内パソコンでのファイルの保存場所、Eメールの使い方など、図書館からは大学図書館の概要と大学図書館での本の探し方について、お話をしました。

実際にレポートを作成する場合の情報源は本だけに留まらず、雑誌に載っている論文記事やデータベースなども参照するべきですが、まずは大学図書館と公共図書館、学校図書室との違いを知ってもらい、図書館に足を運んで本を手にとってもらえるような内容としました。授業が始まった途端、早速レポート課題が出たという噂も聞こえてきます。レポートや論文の書き方が分からないときは、ぜひ図書館のラーニングアドバイザー（院生）にご相談ください。

今回は天候に恵まれず昨年度よりも出席率が低



日本十進分類法



当日の様子

4年生の貸出冊数が増えました

2017年4月より、4年生の貸出冊数の上限が10冊から15冊に増えました。レポートや論文作成時に必要な資料を手元に置いておきたい、ということも増えてくるかと思えます。ぜひご利用ください。



貸出冊数と期間

所属・学年	貸出冊数	貸出期間
学部 1,2,3 年生 2 部 1,2,3 年生 科目等履修生	10 冊まで	2 週間以内
学部生 4 年生 2 部 4 年生	15 冊まで	2 週間以内
院生 研究生	20 冊まで	4 週間以内
卒業生 市民利用者	5 冊まで	2 週間以内

図書館日誌 2016年12月～2017年6月



2016年		5.16	第6回 LA トークイベント
12.5-1.31	展示「司書のおすすめD」第35回		「がいこくご漬けのススメリ目指せ！ 国産バイリンガル」
2017年			5月のゼミガイダンス 13回実施
1.10-2.10	2016年度第2回 Re ユース		第7回 LA トークイベント
1.5	Newsletter No.20 発行	6.1	「文学レポート 考え方のコツ教えます！」
3.23-3.31	蔵書点検		展示「司書のおすすめD」第37回
4.1	英語教育学オリエンテーション	6.3-7.31	トライやるウィーク（1校2名受入）
4.1-	4年生の貸出冊数上限を15冊に変更	6.6-6.7	第8回 LA トークイベント
4.5	学部オリエンテーション 大学院オリエンテーション	6.8	「中国語の達人になろう！一モノゴト への考え方にある日中差異一」
4.7-5.27	展示「司書のおすすめD」第36回		第9回 LA トークイベント
4.8-4.12	初年次教育 学科ごとに実施 (水曜日1回、土曜日5回)	6.22	「～ Let's write right! ～」
4.19	JLP オリエンテーション 4月のゼミガイダンス 18回実施		6月のゼミガイダンス 3回実施

AD ALTIORA SEMPER 神戸市外国語大学学術情報センターだより

第46号 ISSN 0919-2336

「AD ALTIORA SEMPER」とはラテン語で「常により高きを求めて」という意味です

編集・発行：神戸市外国語大学学術情報センター

〒651-2187 神戸市西区学園東町9丁目1

TEL：078-794-8151 / FAX：078-797-2257

URL：http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/

2017年6月30日発行 発行責任者：センター長 岡本崇男